

## 実践報告

# ライフデザインゼミ講義支援における大学生の学び

加藤千恵子\* 佐々木俊子 永谷智恵 渡邊友香 笹木葉子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：ライフデザインゼミ 大学生 ライフデザインイメージ 児童虐待 しつけ(懲戒)

## 1. はじめに

将来のライフデザインを描けるようにするために、その前提となる知識・情報を適切な時期に知ることは重要である<sup>1)</sup>。

ライフデザインゼミ(北海道・本学コミュニティケア教育研究センター主催)の開催は2020年度で5度目となる。本年は、新里徹(旭川児童相談所子ども支援課 主幹)氏を迎え、主に、看護学科2年生の小児看護活動論Ⅰ「被虐待児と家族の看護」履修生と看護学科4年生の母性看護学ゼミの講義支援として、対面講義を開講した。新里氏は、児童相談所で、虐待専掌児童福祉司のスーパーバイズと状況に応じたケース対応を19年間行っており、その知見をもとに講義をしていただいた。その講義を受け、アンケート調査を行い、アンケートで得られた結果から、大学生のライフデザインイメージの学びを明らかにしたいと考える。

## 2. アンケート結果

ライフデザインゼミの参加者は、看護学科2年生 55名(男性6名、女性49名)、看護学科4年生4名の計59名であった。アンケートの回答者は、43名(男性2名、女性41名)で、回収率は72.9%(43/59)であった。その内訳は、看護学科2年生40名、看護学科4年生3名であった。

アンケート回答者の年齢は19-22歳で19.9±0.7歳であった(図1)。

### 1) 少子化問題に関して

65.1%の者が「非常に問題である」と捉えていた(図2)。

### 2) 結婚し、子どもを持ち、親となりたいかに関して

53.5%(23/43)の者が、「結婚し、子どもを持ち親になること」について「とても思う」としていた(図3)。

### 3) 親になるとした者の理由について

「自分の家庭を持つ」とした者が、55.8%(24/43)、「子どもが欲しい」とした者が、44.2%(19/43)、「好きな人と暮らす」とした者が18.6%(8/43)、「一人は寂しい」とした者が14.0%(6/43)であった(図4)。

親にならないとした者の理由では、「自由でなくなる」「自分の夢が大事」「他人と暮らすのが面倒」などであった(図5)。

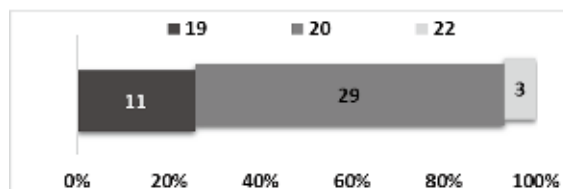


図1 アンケート回答者の年齢

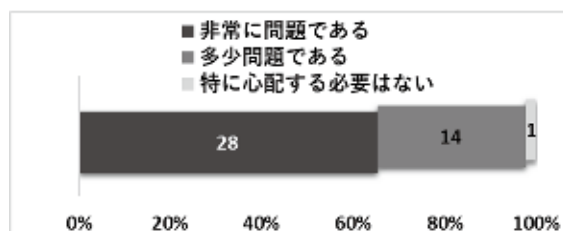


図2 少子化問題について

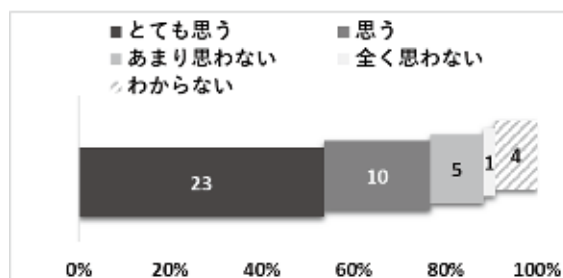


図3 結婚し、子どもを持ち、親となること

\*責任著者 E-mail:chiekok@nayoro.ac.jp

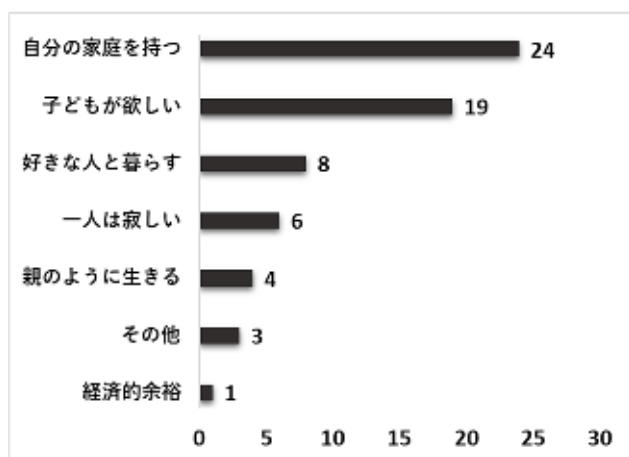


図4 親になる理由（複数回答）

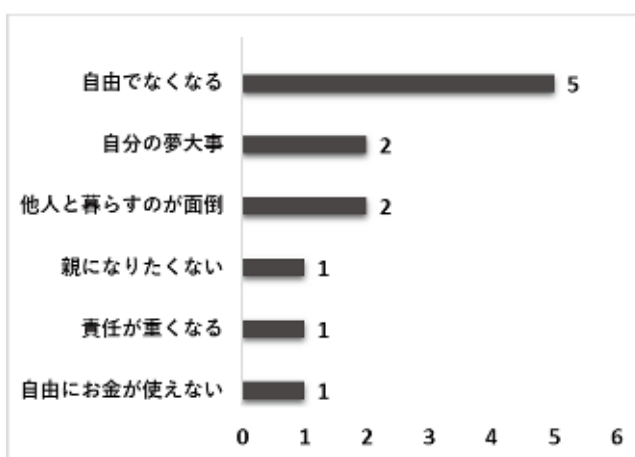


図5 親にならない理由（複数回答）

#### 4) 赤ちゃんのふれあいの機会に関して

赤ちゃんとのふれあいの機会を半数以上が持っている状態であった（図6）。

ふれあいの時期は、各小学校低学年・高学年・中学生・高校生・高校卒業以降に分散していた（図7）。

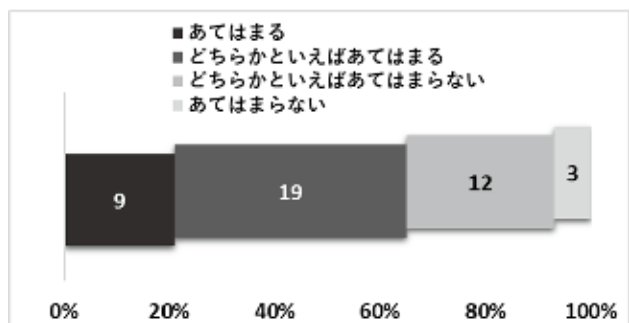


図6 赤ちゃんとのふれあいの機会があった

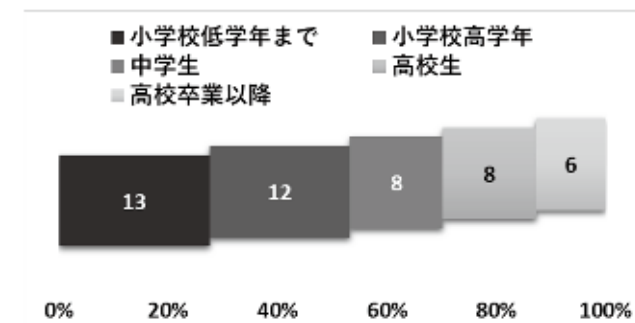


図7 赤ちゃんとのふれあいの時期（複数回答）

#### 5) 現在の育児環境の問題に関して

育児環境に関して、「育児休業のとれる職場環境」69.8%（30/43）、「育児休業の職場支援が不十分」55.8%（24/43）、「両立について配偶者・家族の理解や援助が不足している」58.1%（25/43） ことなどが挙げられた（図8）。

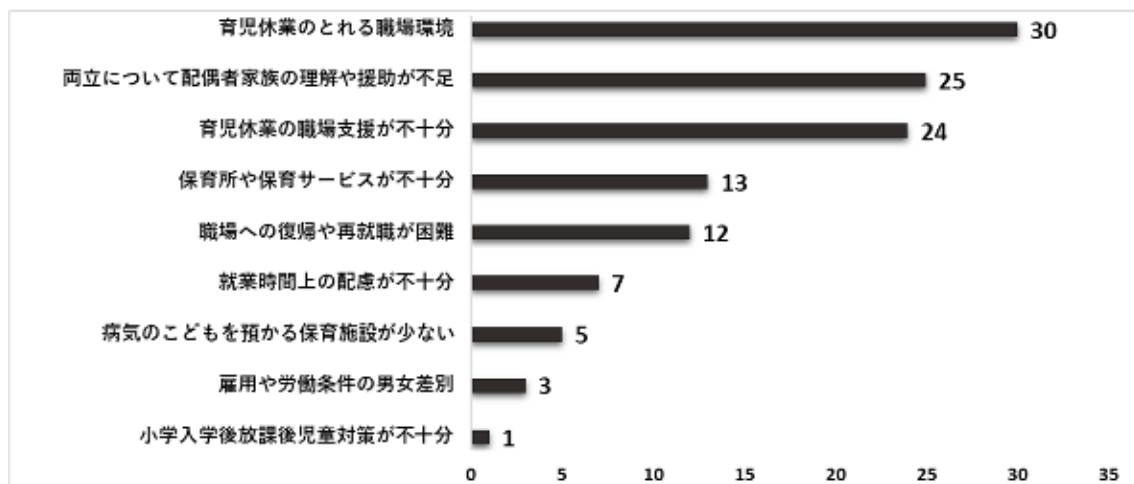


図8 現在の育児環境の問題（複数回答）

#### 6) 将来の家庭と仕事のあり方に関して

「将来結婚し子どもを持ち夫婦で協力して育てる」とした者が 67.4% (29/43) であった (図 9)。

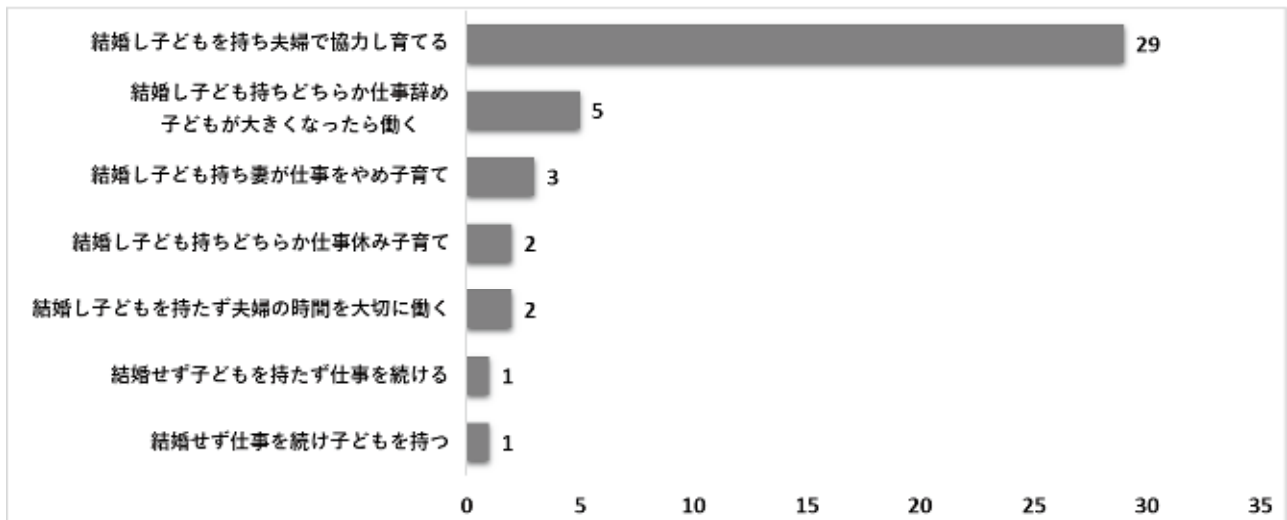


図 9 将来の仕事と家庭のあり方

#### 7) 育児のイメージ

主な育児のイメージは、「難しい」「責任」「楽しい」であった (図 10)。

#### 8) 子どもが育つために大切なこと

「親の子への愛情」「安定した収入」「夫婦の協力」が挙げられた (図 11)。

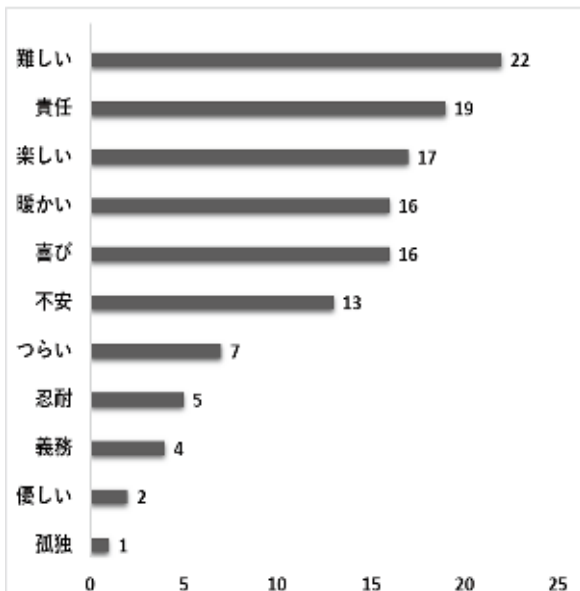


図 10 育児のイメージ（複数回答）

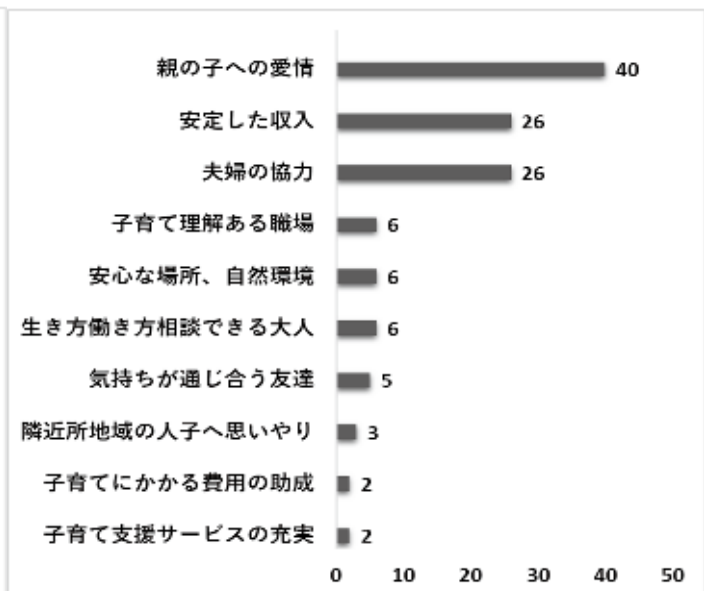


図 11 子どもが育つために大切なこと（複数回答）

#### 9) 職場選択に影響する要因

主な職業選択に影響する要因は、「労働時間と休日休暇」「年収」「仕事と家庭の両立」であった (図 12)。

#### 10) 今後、聞きたい内容

今後、聞きたい主な内容は、「仕事と家庭の両立と制度」「母子保健対策」「子育て支援策」であった (図 13)。



図12 将来、職場選択に重要な点（複数回答）

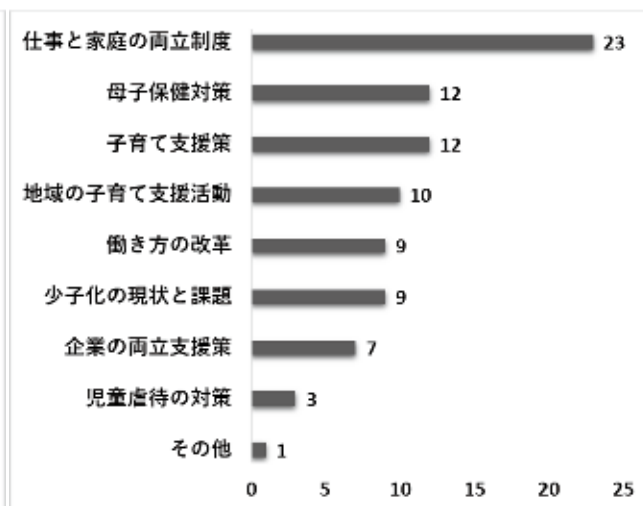


図13 今後、聞きたい内容（複数回答）

#### 11) ライフデザインの大切さの理解

ライフデザインの大切さについて「とても理解できた」「理解できた」とした割合は 90.7% (39/43) であった（図14）。

#### 12) 今回の講演の評価

「大変良かった」、58.1% (25/43)、「良かった」41.9% (18/43) であった。

#### 13) 今後の方向性

「このまま続けた方が良い」とした割合は 100% (43/43) であった。

#### 14) 講演の感想

表1-1、1-2に、講義の感想について、質的にカテゴリ化したものを示す。

感想の記述率は86.0% (37/43)、コードは「121」、サブカテゴリは《116》、カテゴリは<79>、コアカテゴリは【22】抽出した。

主なコアカテゴリは【**猥褻と虐待は本質的に別物であると理解し、この学びを共有し、多くの人に伝えたい** (24)】【**猥褻と虐待の判断は曖昧で難しく、境界、違い、ライフデザインを考える機会、再確認の機会になった** (10)】【**専門家の立場で虐待を見つけたら通告し、子供の安全や成長、関係性を守る責任がある** (9)】であった（ ）内は、カテゴリ数を示す。

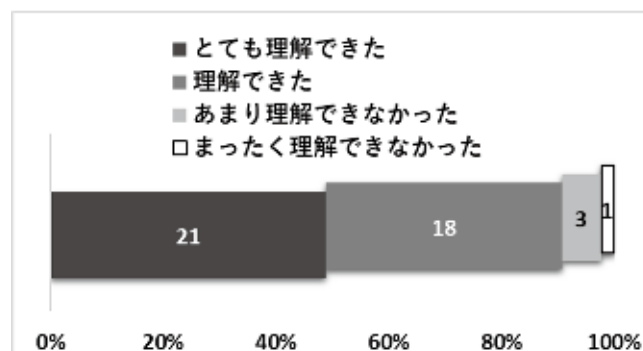


図14 ライフデザインの大切さの理解

表 1-1 記述部分の質的カテゴリ化

カテゴリ<79>	コアカテゴリ【22】
<p>嫉と虐待の根本が本質的に異なることを学ぶ(8)</p> <p>虐待としつけは全くの別物、境界線はない多くの人にと知ってほしいし、学びを伝え、共有したい(6)</p> <p>虐待としつけの違い(区別)がわかりやすく、知ることができ、理解できた(5)</p> <p>虐待としつけの意味を考えると全く違って比べる線上にもないとの話に驚き、納得する(2)</p> <p>「しつけと虐待は真逆のもので、ボーダーを考えると自体がナンセンス</p> <p>虐待としつけの明確な基準、一つの答えを得られ良かった</p> <p>しつけと虐待の違いが気になっていた</p>	<p>嫉と虐待は本質的に別物であると理解し、この学びを共有し、多くの人に伝え、共有したい(24)</p>
<p>嫉と虐待の違いの境界が曖昧でわからなくなることがある(3)</p> <p>嫉と虐待の判断は難しい</p> <p>虐待としつけの境について考える機会となった</p> <p>しつけと虐待の違いを考える機会</p> <p>自己の虐待に対する考えを再確認した</p> <p>結婚や妊娠などの未来のライフデザインを考える機会になった(2)</p> <p>虐待した親の外見やどんな生き方かと背景を考える</p> <p>専門家(看護師)として場面での立場・責任を深く考える(5)</p>	<p>嫉と虐待の判断は曖昧で難しく、境界、違い、ライフデザインを考える機会、再確認の機会になった(10)</p>
<p>虐待を見つけたら通告し子どもの安全や成長を守る(3)</p> <p>虐待を行った時、看護師や保健師が気付き、親子の傷を深くしないようにする</p> <p>子育て時(将来)、今回のことを思い出し、活用する(2)</p> <p>将来、子どもの育て方は十分気をつけたい</p> <p>親になった時、どのようなことを子供にすべきか理解した</p> <p>親は子供の気持ちを尊重し理解しようとする姿勢が大事</p> <p>親は前向きに楽観的に親子の関係性を築く</p> <p>親はどういう行為が虐待か理解する必要がある</p> <p>親になった時、講義を活かし、しつけと虐待を間違えないよう子育てに励む</p> <p>発達段階での親との関わりが重要である</p> <p>児童虐待について知る機会になり良い学び、ためになり、勉強になった(4)</p>	<p>専門家の立場で虐待を見つけたら通告し、子供の安全や成長、関係性を守る責任がある(9)</p>
<p>虐待事例を多く学ぶことができ、良かった(2)</p> <p>わかりやすい</p> <p>虐待についてよくわかる</p> <p>児童虐待に対する人々の意識の違いがわかる</p> <p>ありがとう(感謝)(6)</p> <p>講義を受けられて良かった</p> <p>有意義な時間</p> <p>児童虐待や悩みを抱える家族と関わる方の話は貴重</p>	<p>将来、子育て時、親は、しつけと虐待についての学び(子どもにすべきこと;子を尊重し理解する姿勢、前向きに、楽観的に、関係性を大事にする)を活用する(9)</p>
<p>親は虐待のつもりがないことも多いとわかった</p> <p>知らぬ間に虐待になることがあり、誰でも虐待してしまう可能性がある</p> <p>虐待は身近に潜む</p> <p>虐待としつけは比較できず、隣り合わせ、嫉の支配に気をつける</p> <p>子育てに混乱し、暴力をしたくないがしてしまったという方も多い</p> <p>嫉のつもりが悪影響を起こす場合があり子育ては難しい</p> <p>暴れ回る男子2人に、手を上げた話を聞き、私には子育てが厳しい</p>	<p>虐待事例を多く学び、わかりやすく、意識の違いなどがよく理解でき、勉強になった(9)</p>
<p>家族だけでなく、周囲が気付きサポートするなど、頼れる人がそばにいて、地域で支える、助けを求められる環境づくりが大切である(5)</p> <p>理解できる環境をつくる必要がある</p>	<p>虐待者とその家族に関わった貴重な講義の時間は有意義で受けられて良かった(感謝)(9)</p>
	<p>虐待としつけは隣り合わせ、知らぬ間に虐待になる(悪影響)・虐待のつもりがないことで、虐待は身近に潜み、嫉の支配に気をつけ、誰でも虐待する可能性はあり、子育ては難しい(7)</p>
	<p>家族だけでなく、周囲が気付きサポートするなど、頼れる人がそばにいて、地域で支える、助けを求められる、理解できる環境づくりが大切である(6)</p>

表 1-2 記述部分の質的カテゴリ化

カテゴリ<79>続き	コアカテゴリ【22】続き
虐待する親が全て悪く、子供に酷いことをすると思っていた	虐待する親はひどいことをすると思っていたが、暴力をしよう親の心理(愛情表現がわからない)がわかる(5)
子どもに手を挙げてしまう親の気持ちがわかる	
新たに児童虐待をしてしまう親の心理を学ぶ	
子どもへの愛の表現の仕方がわからない親もいて、児相＝悪い親、問題がありではなく、成長と気づきの機会である	
親も、怒りや感情があり、愛情の注ぎ方がわからないこともある	
虐待など子どもにマイナスの影響を与えることは絶対にあってはならないし許せない(2)	親の言動による子どもへのマイナスの影響は虐待で許せないため、絶対ないように周囲の大人の適切な行動を手本に育てる(4)
親の言動が、子どもにとってマイナスな影響があれば、虐待に繋がる	
周囲の大人の適切な行動やお手本となることを行い、マイナスな影響を与えないように育てていく	
幼少期殴られた	虐待や親の子育ての辛さ、偉大さについて想起する(4)
隣で母親に手をあげられると殴られると思って反射で体が萎縮し、これは虐待だった	
しつけと言われ、自分が悪いことをしたから仕方ないと感じていた	
片親の家庭で過ごし、親の辛さや偉大さを痛感している	
子どもを叩くことで、人の痛みを知らせる教育方法は間違いで、子どもが人を叩くことに抵抗を感じなくなる(2)	痛みをわからせるのではなく、言葉で諭す、他に関心を持たせるなどの冷静な判断ができる大人になりたい(3)
痛みでわからせるのではなく、言葉で諭すかそのほかのことに関心を持たせるなど冷静な判断ができる大人になりたい	
通告を受け虐待でない場合の親のケアが大事である	通告で虐待でなかった場合や虐待した親も虐待を受けた経験があり、親のケアが大事である(3)
通告のほとんどは虐待が起こっておらず、疑わしきと思われただけと聞き、驚く	
虐待した親もされた経験があり、親のケアも大事である	
周りから見ると嫉は虐待である	周囲は子育てを見ており、周囲から嫉は虐待に見える、気づく可能性は誰にでもある(3)
周囲は子育てを見ている	
虐待に気づき助ける可能性は誰にでもある	
子どもを持たない人も増えている	現在の親、社会の特徴;子どもとふれあいが少なく、インターネットの情報で嫉を考えるのが現在の親の特徴である
子どもとのふれあいが少なく、インターネット上の情報で嫉を考えるのが現在の親の特徴である	
虐待児減少に安堵した	社会環境(虐待や産後うつなどの減少)への改善策(家族以外の介入など)が虐待減少に寄与する(3)
負の連鎖を断ち切るために、早い段階から家族以外の人介入し、問題を解決することが大切	
マタニティーブルーを防ぎ、産後うつを予防する上での解決策を社会が率先して行い、虐待を減らす	
社会環境が良くなり、虐待や産後うつが減少すればいい	孤立し悩みを抱えると虐待に繋がることがあり、対策が必要である(2)
1人で育児の悩みを抱えると、虐待に繋がることがあると学ぶ	
孤立し、1人で悩みを抱え込まないような対策が必要である	子どもを授かり、親になった時、想像を絶する大変さが耐えられるか不安である(2)
親になった時、耐えられるか不安である	
子供を授かった時、想像を絶するほど大変と思う	虐待について興味深い(2)
児童虐待について興味がある	
興味深い内容	児童虐待の定義づけに関する知名度と内容の共通点(2)
児童虐待の定義の確率に伴い知名度が上がる	
定義付けで、受け手(子ども)の感じ方による部分が、いじめと似ている	ライフデザインについて、わからない
ライフデザインについてはわからなかった	
多角的な視点で患児を捉える	患児の捉え方;多角的視点

### 3. 考察

#### 1) 虐待のテーマとライフデザイン

今回は、虐待事例に関する具体的内容と虐待に関する基礎知識を主に伝えていただいた。そのため、虐待の内容と自身のライフデザインへと思考を発展させて考えることの難しさが記述から明らかになった。参加学生は自分の将来や親になる人々が虐待としつけの違いを学習して、これから築き上げる家庭で虐待が起こらないようにと考える機会となり、職業人として対象児を発見した場合の通告義務や役割について考えることができていた。また、虐待の通告後、虐待ではなかった場合や親自身が被虐待者である場合に、親もまたケア対象者であることなどに気づけていた。このような内容を学ぶ機会を継続し、伝え、共有していくことが重要である。

#### 2) 受講生のライフデザインイメージ

受講生の7-8割の者が「結婚し、子どもを持ち、親になる」と考えていた。その理由として、「自分の家庭を持つ」55.8% (24/43) は昨年同様6割であるが、「子どもが欲しい」は44.2% (19/43) と昨年度の6割から明らかに減少している。社会情勢がコロナ禍にあり、ソーシャルディスタンスを保ち生き抜くという点での影響が否めない。子どもを持つことのハードルは一層高くなっていることが示唆される。

一方、親にならないとした理由に、「自由でなくなる」「自分の夢が大事」があり、束縛を嫌い、自分の目標に向かいたい思いがあると考えられる。

大学生の育児のイメージは「難しい、責任、暖かい、楽しい、喜び、不安」というものであり、子育てに関する難しさや喜びなどのアンビバレントな感情を身近な親の子育てから感じ取っていることがわかり、この講演に参加することで過去の出来事について想起し、考える機会になっていた。

子育ては難しく、将来、親となる者の責任として、虐待としつけの違いなど、親になるための学習をする必要を感じていることがわかった。加藤らは、養育者支援プログラムの必要な要素として、「アタッチメント促進を図る支援」「コンディション（感情コントロール）をはかる支援」「文化的要因と親のしつけに関する認識に焦点を当てた心理教育や支援」「子どもの状態や内面を理解する支援」「具体的に関わるスキル獲得の支援/具体的生活支援」の5つを挙げており<sup>2)</sup>、これらを網羅した具体的教育が必要と考える。

宇野は、保護者の懲戒について理論記述を分析し7つの意味<sup>3)</sup>を抽出しており、その中の「懲戒と虐待との判別困難性」「保護者の被懲戒の個人史」が、学生の記述に該当すると考える。

楽しい、暖かい、喜びという肯定的感情は、親の子に対する愛情と安定した収入、夫婦の協力が基盤となることが示唆される。

#### 3) 学生が希望する就労条件

学生が就労先を判断する条件は主に「労働時間や休日・休暇」「年収」「仕事と家庭の両立」「職場の人間関係」で、学生自身が無理なく、豊かに生活できることに重点を置き、将来について9割以上のものがイメージすることができていた。

今回の講義支援が学生に与えたものは、虐待としつけがまったくの別物であり、境界を明確に示されたことで、自分の中にあった出来事を想起し、親となる、または、職業人（看護職）となる自分に置き換え、思考を整理する機会を得たことにある。

今後の方向性として、仕事と家庭との両立や母子保健対策、子育て支援策のニーズがあり、この企画の継続は必要である。

### 4. まとめ

1) ライフデザインの講義支援で、虐待としつけという境について、まったくの別物であるとの明言されたことで、大学生が自分の中であった出来事を想起し、親となる、または、職業人（看護職）となる自分に

置き換え、思考を整理する機会を得ることができていた。

- 2) 大学生のライフデザインイメージは、「結婚し、子どもを持ち夫婦で協力して子どもを育てる」と考えているものが多く、その育児のイメージは「難しい、責任、楽しい、暖かい、喜び、不安」で、このアンビバレントな感情を身近な親の子育てから感じ取り、将来、親となる者の責任として、虐待としつけの違いなど、親になるための学習をする必要を感じていることがわかった。
- 3) 今後の企画の方向性として、仕事と家庭との両立や母子保健対策、子育て支援策のニーズがあり、継続は必要である。

## 5. おわりに

本学、小児看護活動論Ⅰと母性看護学ゼミに参加した学生のライフデザインイメージと虐待としつけ、子育てに関するイメージと学びについて述べた。

今後も北海道とのライフデザインに関する事業を継続し、情報提供の一機会とできるよう、また、学生のこの活動に関するニーズ調査の結果から、さらに、方法と内容を検討し、より学生のニーズに即した活用ができるものとしていきたい。

このライフデザインゼミの開講にご協力いただきました株式会社インサイト奥田正克様、調査にご協力くださった学生の皆さまに心より御礼を申し上げます。

## 付記

本稿は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターと北海道の主催事業である。

## 引用文献

- 1) 的場康子（2016）少子化対策としてのライフデザイン教育を考える、Life design report. p.39-42、第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部。
- 2) 加藤尚子、藤岡孝志（2020）しつけ（懲戒）と虐待の境界の認識に関する検討～フランスの懲戒行動に関する現状をふまえて、日本社会事業大学研究紀要 66：149。
- 3) 宇野耕司（2020）懲戒ではなく虐待である：児童相談所職員からみた保護者の懲戒の意味に関する研究、日本社会事業大学研究紀要 66：59-78。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省（2020）体罰等によらない子育てのために～みんなで育児を支える社会に～、<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/minnadekosodate.pdf>（2021.3.2閲覧）
- 2) 厚生労働省（2020）体罰等によらない子育てのために～みんなで育児を支える社会に～ポスター・パンフレット・リーフレット、<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/taibatu.html>（2021.3.8閲覧）
- 3) 細坂泰子、茅島江子（2019）育児支援における4コマ漫画の活用～しつけと虐待の境界に焦点を当てて～、母性衛生 Vol159、No.4：896-905。